

# 飯隈遺跡群

今から1,500～1,600年前の古墳時代中期に志布志湾岸や肝属平野部では、横瀬古墳という大型前方後円墳をはじめ、多くの古墳が造られました。飯隈遺跡群内に存在する飯隈古墳群もその一つです。

『大崎名勝誌』の「飯隈山由緒帳」には、和銅元年（708年）に修験道開祖 役小角の弟子である義覚がこの地にやってきて、飯隈山を開山し、新熊野三社権現を勧請し、本地阿弥、薬師、観音の三尊を安置したと記されています。また天平15年（743年）に聖武天皇の勅願所の宣旨を受け、神領一千石を支給されたとも記されています。

中世以降も本山派修験の京都天台宗聖護院の末寺として、聖護院や近衛家などの中央勢力や島津各代の藩主と深く関わり、南九州最大の修験道場として君臨しました。

しかし、廃仏毀釈によって飯隈山の寺院は破壊しつくされ、長く続いた「聖域」は完全に失われてしまいました。

今もなお、一帯には飯隈遺跡群には古墳時代の遺跡と、古代以降の飯隈山の寺院に関する遺跡が存在していると思われる。



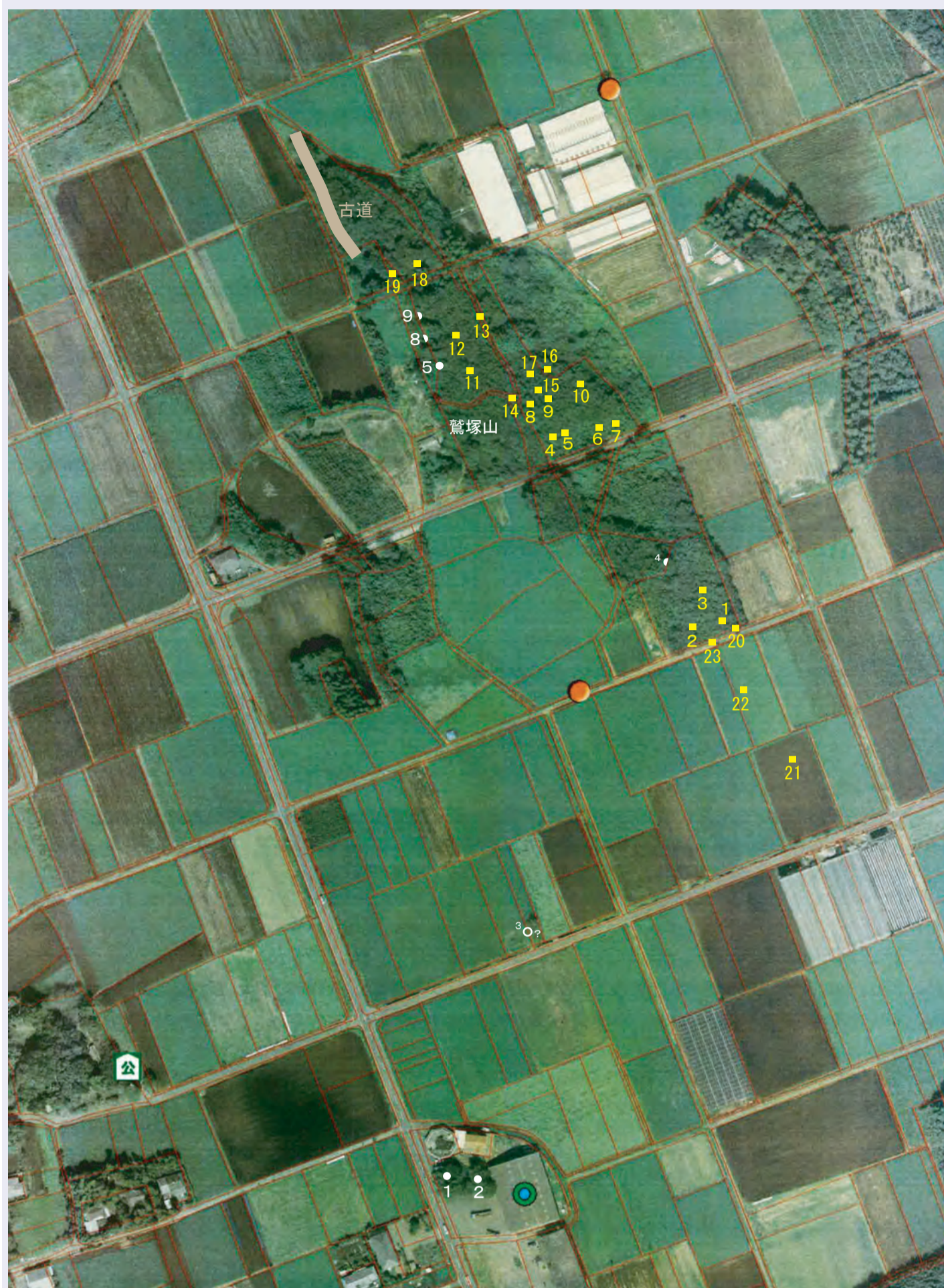
**1 若一神社**  
永禄13年（1570年）建立。祭神は切目王子。大崎郷の三の宮で、本殿に丸に十の字の文様があることから、島津氏との関わりも想定される。



**2 飯福寺の石塔群**  
長年、野積みされていたものを昭和58年に調査し、宝塔21基、方篋印塔9基、五輪塔53基、残欠相輪48基、空風輪130基、板碑3基が確認された。一部を復元し、昭和59年に町指定となっている。



**3 仁王像**  
飯隈山照信院の門前にあった。明治初期の廃仏毀釈で破壊された。地元の人々によって復元されたが、阿像の首は発見されていない。鎌倉時代の作と推測される。昭和51年に町指定となる。



飯隈台地には確認されているだけで9基の古墳が点在する。上記の写真内には1～5号、8号、9号までの古墳の位置を示している（白丸で示している）。ただし、3号墳は消失し、4号墳と8号墳、9号墳は過去の造成により半壊している。主に円墳である。

その他に鷲塚山を中心に地下式横穴墓が多く造られている。平成22、23年度の確認調査と平成27年度の農道整備及び、耕作地の崩壊による発見で24基の地下式横穴墓が発見された。昭和30年代の耕地整理では多数の地下式横穴墓が発見されたといわれている。教育委員会では4基の地下式横穴墓について記録が残っている。



←飯隈鷲塚地区1号地下式横穴墓。手前の穴は竪坑。先の小さな穴は玄室の天井の一部が崩落してできたもの。人骨から女性の墓と判断できた。先の樹木の所に飯隈鷲塚地区20号地下式横穴墓がある。



→飯隈鷲塚地区21号地下式横穴墓。平成27年10月に耕作中、玄室の天井が崩壊して発見された。手前が竪坑で、羨門が見える。この墓には2体の人骨が確認されている。



↓飯隈鷲塚地区22号地下式横穴墓人骨（男性の人骨。顔に赤色顔料が塗られている。）



↑飯隈鷲塚地区23号地下式横穴墓玄室内。若い女性の人骨には刀剣等の武器が副葬されていた。

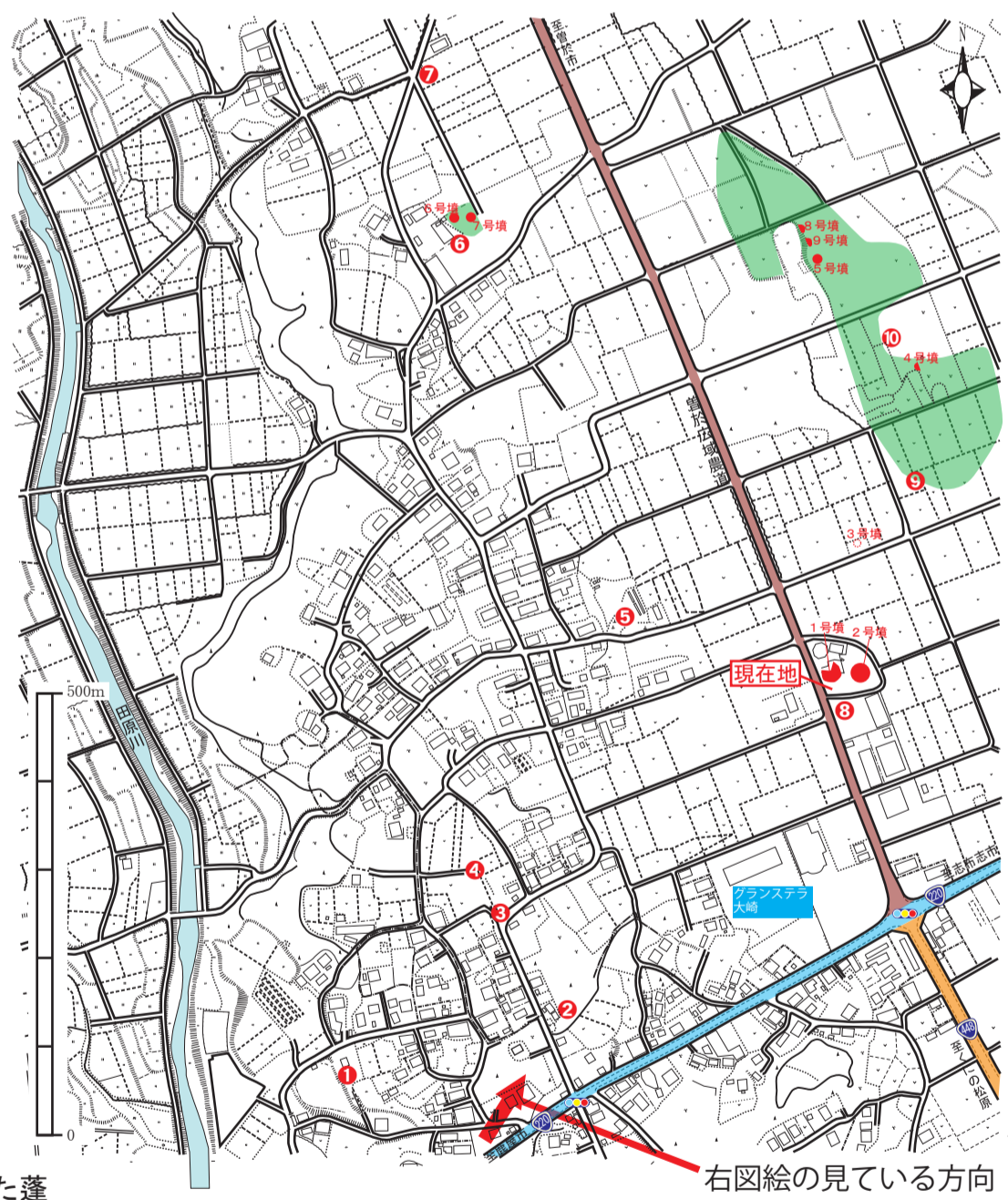
一昭和30年代の耕地整理では、たぐきんの地下式横穴墓が破壊された。そのうち河口貞徳氏によって調査されたもので、軽石製の組合式の石棺を伴う立派なものも発見されている。右図は男性の人骨で、完全な状態で発見されている。右図は身長は約170cmと記録されている。



**4 飯隈山照信院本社跡**  
飯隈山照信院本社があったとされる場所には、現在「熊野神社」として社が建てられている。昭和54年に畑から発見された正観音像と如意輪観音像が安置されている。



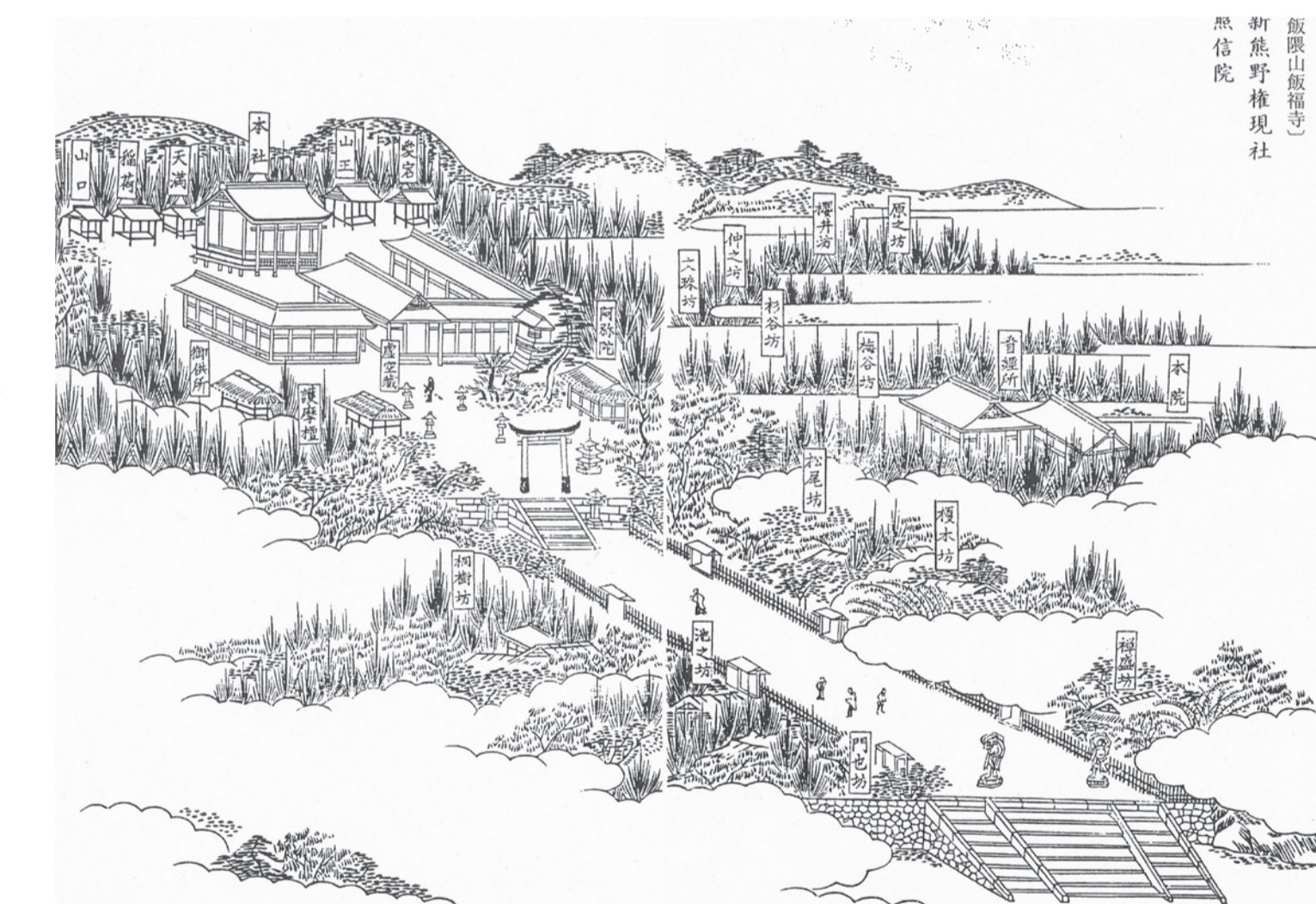
**5 飯隈山別当本坊の墓所**  
延文4年（1359年）に島津氏に敗れた薩原城主 教仁郷頼世の弟 朝元が出家して36代目の別当職となった。以後、別当職は代々教仁郷氏に受け継がれることとなる。ここには江戸時代の歴代別当職ほか一族の墓が多く存在する。この中に教仁郷朝次の墓がある。第19代島津光久の小姓として仕えており、薩摩藩の水路開発や干拓事業に携わっていた。三文字の湿地帯に大量の木を浮かせて基礎を造り、地頭飯屋から永吉台地に渡る最短の道を完成させた人物である。



**6 飯隈6号墳・7号墳**  
山頂に2基の円墳が存在する。



**7 義覚上人の塔**  
山頂に2基の円墳が存在する。



↑新熊野権現社照信院図「三國名勝図絵」より

飯隈山を開山した義覚の墓と伝えられるが、義覚は天平20年（748年）に亡くなっているため、この五輪塔は後世に建てられたものと推測される。地元では「いぼ」に効く神様として「いぼとけ」と呼んでいる。昭和51年に町指定となる。



**8 立花喜林の石塔**

一文化7年（1810年）2月28日に、立花喜林の妻が寄進した旨が刻まれている。かつては石塔の近くを通ると、どこからか鈴の音が聞こえていたという。立花喜林という修験僧が即身仏になるため、生きたまま穴に入ったものの、約束の3年を経過しても遺体を誰も掘り出さず、橋本坊では代々それを後悔していたという逸話があった。

## 10 鷲塚山

妖怪が村人を悩ませることが多く、建治年間（1275～1285年）に飯福寺中興覚進上人が天竺の靈鷲山の土をこの山に埋め、3つの塚を築き、釈迦如来、千手観音菩薩、弥勒菩薩の三尊に見立てて、三世一体蔵王権現を勧請し、悪魔封じの秘宝を唱えた。その後妖怪は現れなくなった。靈鷲山の鷲の字を取って、鷲塚山と呼ぶようになった。



平成27年に畑かん農道整備に伴い実施した飯隈鷲塚地区1号地下式横穴墓と20号地下式横穴墓の調査の様子。写真の山林は小高い丘が南北に伸びている鷲塚山である。ここに古墳や地下式横穴墓が分布している。



鷲塚山頂にある3基の円墳の1つである5号墳。覚進上人が築いた「3つの塚」は、本来古墳時代の円墳で、これを三尊に見立てたのではない。

地下式横穴墓（ちかきまぐら）のあらまし

古墳時代に造られる古墳には、上からみた形が円形をした円墳、方形をした方墳、円墳と方墳を組み合わせた形の前方後円墳などがある。これらは土を盛って、そこに埋葬施設を造る構造で、これを「高塚墳」と呼ぶ。高塚墳は、当時近畿で勢力を拡大していたヤマト王権の王族や豪族の墓の影響を受けたもので、特に本町横瀬にある大型前方後円墳である横瀬古墳や神領古墳群などはヤマト王権と深くつながっていたことが分かっている。横瀬古墳や神領古墳群が築造された6世紀に志布志湾岸や肝属平野部では、「地下式横穴墓」という高塚墳とは異なる形の墓が造られた。右図のとおり、まず竪坑を掘って、竪坑の下部を今度は、横に掘っていき、玄室を設け、そこに遺体を埋葬する。埋葬した後は、横に掘った入り口を土塊や、木材、石材などで塞ぎ、竪坑を埋める。玄室内の埋葬施設は竪坑から見て横方向に広く掘る場合と、縦方向に広く掘る場合とがあって、前者を「平入り」、後者を「妻入り」と呼ぶ。また、大隅半島では軽石を組み合わせた石棺の中に埋葬されているものもあり、飯隈遺跡群でも昭和30年代に発見されている。刀剣類や貝の装飾品が発見されていることから、横瀬古墳の被葬者に従属する集団の中で、リーダー的立場にあった人々の墓と考えられている。

1 横瀬古墳

横木を植えた土盛り出し

羨道の上部が崩落して発見された飯隈鷲塚地区22号地下式横穴墓。上2枚は鹿児島大学総合研究博物館が遺構のデジタル写真をもとに立体化した画像である。右側の写真は左側の写真をやや下側から見た画像である。玄室の天井のつくりから、玄室は家型をしており、天井の頂部には「横木」を横した形で造り出している。玄室の壁面が白く見えるのは、火山ガラスの粒子が塗り付けられているためである。床面にも火山ガラス粒子がまかれていた。（写真提供：鹿児島大学総合研究博物館）